

大阪の下町と路地

谷 直樹(大阪くらしの今昔館館長)

私が館長をつとめる「大阪くらしの今昔館」には、大阪市の空堀通の精巧な模型があります。模型の舞台は、1938(昭和13)年8月24日に設定されています。一見江戸時代のように思えますが、よく見るとすずらん灯と呼ばれるしゃれた街灯があり、町家も軒蛇腹のついた本二階建て。表長屋の脇から路地が延び、奥には裏長屋がぎっしりと並んでいます。路地には共同水道、共同便所、地藏堂などが設けられています。この模型は、地籍図に基づくだけでなく、当時住んでいた人に聞き取りをし、裏長屋の格子の種類、共同水道のまわりの石鹸置場など細部にまで再現しています。



さらに月日の設定を8月24日にしているのは、この日が地藏盆の日だからです。路地の奥にあるお地藏さんの前では、仮設の屋根を設け、お坊さんの横で浴衣を着た子どもたちが輪になって数珠繰りをしています。もともと空堀は徳川幕府の御用瓦師の土取り場として始まり、江戸時代の中頃から長屋が建てられ、明治時代には空堀商店街が発展。商店街の裏通りに路地と長屋が縦横に広がっています。上方落語の「駱駝」などにも登場し、オダサクこと織田作之助が描いた大阪町人の暮らしの舞台でもあります。

空堀は、戦災を免れ、今でも伝統的な居住空間や路地などが残されている大阪でも数少ない地域です。近年は、そのたたずまいを活かした「からほりまちアート」などの取組が盛んに行なわれ、多くのまち見学者を集めています。もうひとつ路地を介したコミュニティ再生としてご紹介したいのが、大阪市立大学の学生たちと一緒に行った「豊崎長屋再生プロジェクト」です。

豊崎は、大阪梅田の高層ビルが建ち並ぶ都心に隣接し、大阪駅からも歩いて20分ほどの所にあります。当然、郵便局、病院、銀行、商業施設なども徒歩圏に揃い、生活環境の整った住宅地です。この地域にある「豊崎長屋」は大正末年に誕生し、昭和の戦前戦後を通しての家主と借家人が育んできた暮らしの文化が残っている所です。豊崎長屋は、300坪ほどの敷地の中央を土のままの路地が通り、家主が住む主屋と5棟15軒の長屋建ての借家が配置されています。木造の主屋は丁寧に住みこなされていて、路地の掃除や水まき、盆栽の手入れなど共同空間の維持管理もしっかりと行なわれています。

住人たちは、昭和30年代、40年代の同じ時期に子育てをし、今では高齢者だけの世帯になっています。気心の知れた人間関係の中で生活を続けていて、心地よい暮らしがずっと連続されています。

学生たちと路地を中心にした長屋建てという空間の中をそのままに、台所の土間を床土化するなどのリフォームを施しました。ここで路地は、お互いの暮らしの境目であり、お互いの暮らしの接点でもあります。あいさつ、見守りなども自然に行なわれ、程よいコミュニティの原点で、心地よい空間を醸し出しています。そのためか、リフォームを行なった学生たちが、空いている長屋に住みたいと思い始め、今までにない暮らしやすさ、心地よさを体感しているようです。

空堀も豊崎も、まちの魅力は、大阪の他の地域で失われた庶民の生活文化が残されている点だと思います。それは、昭和の60年間に蓄積された先人たちの“住みこなす知恵”の集積です。昔の大阪を知る高齢者にとっては懐かしい記憶の場であり、若者や芸術家などにとっては未知の文化を体感する場として新しい魅力を放っています。今、私たちは、“昭和の生活文化”と言う歴史的資産に気づき、今なおずっと続いている生活文化の歴史的価値にスポットを当て、現代社会に活用することが、求められているように思います。

都市空間と路地、横丁

加藤政洋(立命館大学准教授)

大阪の路地というと、すぐさま宇野浩二『十軒路地』(1925(大正14)年)、百田宗治『随筆 路次ぐらし』(1934(昭和9)年)、そして織田作之助『わが町』(1943(昭和18)年)といった文学作品が想起されます。近代日本がある種の文化的な成熟期を迎える1920年代、都市には、さまざまな意味において、光と影、あるいは表と裏の空間が生み出されたのでした。市井に生きる人々の姿を描く路地文学は、都市空間の表裏を見事に浮き彫りにしています。宇野浩二によると、大阪の路地(ろおじ)は、東京の路地とは意味が違うといいます。織田作は、『わが町』のなかで、「地藏路地はLの字に抜けられる八十軒長屋である」とか、「なか七軒挟んでLの字に通ずる五十軒長屋は榎路地である」などと記していました。島之内の艶やかな路地空間(十軒路地)、そして「いったいに貧乏人の町である」という織田作の河童路地との対照性はさておき、路地とは、表通りからの通路のみならず、裏長屋をも含む居住空間の総体を指す呼称なのでした。

ところで織田作は、法善寺横丁や鴈次郎横丁といった、盛り場「千日前」の周辺にある別種の路地空間(食傷街)を描いてもいました。一般に路地が生活空間であるとするならば、横丁は飲み屋のひしめく商業空間ということができそうです。法善寺横丁は2003(平成15)年の火災後に復興されて現在にいらりますが、旧来の横丁はほとんどその姿を消しているのが現状です。2015(平成27)年に幕を閉じた梅田のぶらり横丁もそのひとつで、ひところニュースになりました。



ぶらり横丁は、飲み屋街としての横丁の典型でありながら、ある意味では大阪独特の空間でした。なぜなら、(なじみのある方はご存知のことと思いますが)梅田の地下街の片隅に立地していたからです。1953(昭和28)年の開業というので、60年以上もの歴史を有するわけで、通り慣れた人には違和感のない風景であったかもしれません。

しかし、ふと立ち止まって見ると、実に奇妙な光景です。狭い通路を挟んで並ぶカウンター式の店舗は、西梅田と大阪駅・梅田方面のあいだをせわしく行き交う人びとの目に、どのように映っていたのでしょうか。横丁の通路は通り抜けることも可能でしたが、飲食を目的としない限り、わざわざ進入する人はいなかったでしょう。暖簾がさがり、丸いすの並ぶ風景は、地上の盛り場にある横丁と見まがうばかりです。

釜ヶ崎に暮らし、小野十三郎に師事した詩人の寺島珠雄は、キタのビルのなかに、そして地下街にも立ち呑み屋があることを、多少の驚きをもって記していました。しかも、朝の9時過ぎから開いている店もあります(わたしはそのことの方に驚かされます)。

大阪の地下街開発を一手に引き受けてきたのは大阪地下街株式会社ですが、ふりかえってみると、1957(昭和32)年の暮れに誕生したナンバ地下センター(現NAMBAnan'nan)には、街区の東端に飲食店が配置されて飲み屋街の体をなしていますし、1968(昭和43)年開業のアベノ橋地下センター(現あべちか)には、その名も「あべの横丁」なる飲食店街が設定されています。ここにもまた、当然のように、暖簾といすのある呑み屋が入っています。

わたしの見たところ、どうも「ぶらり横丁」が、このような地下街横丁のプロトタイプになったように思われるのです。1945(昭和20)年、織田作の愛した鴈次郎横丁は灰燼にきましたが、それから10年とたたずして、ミナミとは対極のキタに位置する、しかも地下街に、新しい横丁が誕生していたのです。このように考えてみると、わたしたちは貴重な空間アセットをまたひとつなくしてしまった、と言えるかもしれません。

滋賀県

「かつての辻子」(大津市)



中心市街地の琵琶湖から離れた内側の街中には「辻子」などと呼ばれる細道が、数多く残されています。辻子には名前が付いていて、その名前は、今から300年以上昔の元禄時代の絵図にも記されています。「御歯黒辻子」「糠辻子」「観念寺辻子」「九品寺辻子」「勘八」「袋町」などで、由来が不明でも、今も地元の方々は、そのように呼んでおられます。

袋町は、現大津市中央1丁目7と同8の間の細道。この名前は元禄8(1695)年の絵図にも見えています。年配の方の口では、この細道の真ん中が、橋本町と中堀町の境で、木戸門があり、通り抜けできない袋小路だったということです。ちなみに、これらの町名も、現在は町名変更により何丁目表記になっています。ただ、自治会名としては生き残っていて、旧町名の表示板(昔の仁丹のホーロー看板を模したもの?)が取り付けられています。

御歯黒辻子は、大津市松本2丁目2と同8の境の細道。これは推定ですが、この細道を抜けたところが、昔は遊郭だったと思われます。(樋爪 修 大津市歴史博物館館長)

芹橋地区足軽組屋敷付近「武家文化が残る」(彦根市)



城下町彦根には数多くの路地があります。城下町の一番外側には足軽組屋敷が集まって建てられ、今もその路地の町割りは現代にも受け継がれています。それは自然発生的にできた路地ではなく、計画的につくられた整然とした路地です。足軽組屋敷は、木戸門や塀に囲まれ小さいながらも武家屋敷の体裁を整えています。ごちんまりとした小さな屋敷は明治以降も庶民の住まいとして住み継がれ、今でも数十軒の屋敷が残り江戸時代の風情を感じられる落ち着いた町となっています。

かつて「辻番所」と呼ばれる見張り小屋が町のあちこちにあったとされ、現在もその一軒が現存しています。近年解体修理により蘇り、今では住民のみさんの協力で一般公開されています。また地域のコミュニティの拠点として、まちの絆を未来につなぐ場となっています。(笠原啓史 建築設計)

京都府

石堀小路(京都市)



路地の魅力とは何だろうか。ちなみに京都では少なくともロジなどとは言わず、ロー(オ)・ジを低・高・低で発音する。無数にあるロージだから、どれかをということになると迷うが、やはり石堀小路をあげたい。

京都のロージではごく新しいもので、私の子どもの頃には今のような姿ではなかった。八坂神社門前にあたるから、通路としての小路はあったかも知れないが、今のよういわば整備されたのは戦後、それもあり経ってからだ。市電が廃止されてその敷石を敷き詰め、風情ある現在の道ができた。自然にできたのではなく、人の営みが石堀小路を造ったのである。地域の人の暮らしの営みと一体となってこの道の今があることに、私は感動を覚える。(井上満郎 京都市歴史資料館長・京都産業大学名誉教授)

高薬団子(京都市)



『京都魔界巡礼』(PHP文庫)を書いていた時に、気になって頻繁に通っていた団子である。目を引くのが神田明神祠だ。御祭神・平将門は関東の桓武平氏一族の英雄で、「新皇」と称して中央政権の擄取に対して反旗を翻す。しかし東国で討たれて時代を代表する怨霊となる。将門の生首は京都に運ばれてこの辺りに晒されたという。晒し首は胴体を求めて関東へ飛び去ったと伝わるが、往時の人々が将門公の怨霊を恐れた様子はさまざまな文献にある。空也上人が怨霊を鎮めるために念仏道場を建立し、怨霊を祀る祠を建てたという。「空也供養(くうやくよう)」が転じて「膏薬」になったという。狭い路地空間に「壮絶な魔界」と現在も「供養する心」が同居するという、千年という時間軸が秘められているのがこの路地の魅力なのである。

北側入口に祇園祭の郭巨山、南側には伯牙山御神体を飾る会所があり、今も怨霊を封印する結界が張られていると感ぜられる。(丘真奈美 合同会社京都ジャーナリズム歴史文化研究所代表)

大阪府

空堀商店街付近(大阪市)



大阪のまちにも、こんな良い感じの空間があるんや、と思うところです。『プリンセス・トモミ』の世界に浸ることができます。(土井 勉 大阪大学特任教授・一般社団法人システム科学研究所上級研究員)

お地藏さんがあちこちに祀られていて、情緒があります。その中で私が特にひかれたのがこの路地。商店街から横道に入り、さらに脇の路地に入って突き当りに、小さな小さなお地藏さんが祀られていました。親指と人指し指をひろげたくらいの背丈しかありません。木切れをざくっと彫って最後にちよんちよんと目鼻を入れました、というおもむきですが、こんなに素朴で愛くるしいお地藏さんを私はこれまで見たことがない。手にたずさえた錫杖も、折れそうにきやしゃ。私は板きれ地藏さんと勝手に命名しました。路地はこんな発見があるから面白い。(本渡 章 作家)

旧吹田村旧仙洞御料庄屋屋敷西尾邸北側(吹田市)



路地と言えば、木造密集市街地の、生活のにおいの漂った、そんなものを思い浮かべるのですが、吹田村のその路地は、そういうとは違うのです。江戸時代、天皇や貴族の遊び場だった仙洞御料屋敷旧西尾邸と、その北側の茅葺きの豪農の屋敷にはさまれたその路地は、高い塀に挟まれた細長い空間で、特に桜の季節にはその細い空間にはりだした桜の木から、路地一面に花びらが舞い降り、これはどこの場所だったのかと思うほど、異次元の空間となります。

西尾邸は、音楽家貴志康一の生家であり、植物学者牧野富太郎の温室があり、建築家武田五一設計の離れがある、昭和初期に華々しい生活の時間が流れていた屋敷で、ビール工場の労働者が多く住んでいた周りの暮らしとは隔絶した場所でした。それを象徴する高塀が、美しい路地をつくり出しているといふなんと不思議な空間なのです。(岡絵理子 関西大学准教授)

兵庫県

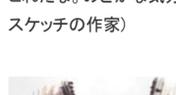
モトコー「高架下の商店街」(神戸市)



三宮から元町にかけての高架下としても古い「モトコー」を挙げたいと思います。阪神大水害、第二次大戦、阪神・淡路大震災と三つの災害を乗り越えた高架です。その下に連なる商店街「モトコー」。ユニークな店が集まり、いまだに異彩を放っています。(永田 収 カメラマン)

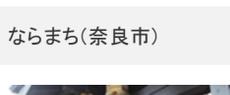
江井ヶ島「イカナゴの香漂う路地の春」(明石市)

江井ヶ島漁港から別にあてもなく歩いてみた。漁港には路地がつきものだ。吸い込まれるように路地へと向かった。明石育ちの私は漁師町にとっても親しみを感じる。すかさずスケッチを始めた。と、どこからか犬が吠え始めた。私に吠えているのか?怪しい人間と思われるから早く黙ってくれ!と願うのだがひたすら吠える。勘弁してよ~と思いつつ、私もスケッチを止めない。やっとならなくなり、何もなかったようにまた歩き出した。あの犬はいついこの家にいるのだろうか...最後まで姿は見えなかった。今度はどこからかイカナゴの釘煮の香りが漂ってきた。春といえばこれだな。のどかな気分がほっこりする。あの犬だけはいまだに吠えているけど...。(ごとうゆき クレイドールと旅スケッチの作家)



奈良県

ならまち(奈良市)



「ならまち」は、近鉄奈良駅から南へ徒歩10分、世界遺産元興寺の旧境内に栄える町である。元興寺の歴史は古く、日本最初の寺院・明日香村の法興寺を起源に持つ。この寺の境内が商業の町として栄えたのは、江戸時代から。空襲など数々の災害から守られ、今も多くの町屋が残る。町の形成は、自動車などない時代。当然、車がやっとならぬ路地、歩いてしか進めない路地が入り組んでいる。最近では、観光地となり、お洒落なカフェなどが立ち並び、国内外の観光客が散策する姿を目にする。

私のお薦めスポットは、青面金剛像を祭る祠「庚申堂」。前に立つと、赤い猿のお守りが数多く軒先に吊るされている。このお猿、人々の災いを代わり受け止めてくれることから、「身代わり猿」と呼ばれ、また、背中に願いを書き加えてくれるとされ、「願い猿」とも呼ばれている。観光客も、近くの奈良町資料館で購入できる。2016(平成28)年は申年。是非、ならまちを訪れてほしい。(松下育夫 近鉄グループホールディングス(株)監査役)

法隆寺「西院伽藍」大垣 東面(斑鳩町)



法隆寺さん東大門前を南北に通る土塀沿いの路地は面白い。何といっても土塀は重要文化財である。絵画や仏像と違って土塀は年中監視するわけにはいかない。休日は、斑鳩を訪れた人たちが通行するが、法隆寺さんの東側は東里といい、日常生活の場でもある。自動車の対向はできないが、通行禁止ではなく、忘れた頃に宅配車が瓦や土塀を傷つけたり、また落書きが見つかったりすると地元新聞に大きく取り上げられるという路地である。ちなみに東大門前の辻本小路からは、夢殿をバックに朝日や、五重塔をバックに夕日に沈むのを見ることができるポイントである。(杉田龍哉 (公財)関西・大阪21世紀協会文化事業部チーフプロデューサー)

和歌山県

味光路「飲み屋街の路地」(田辺市)



田辺は城下町の名残で昔ほどの道を行っても一度突き当たらないと次に進めない、隣町育ちの私にとってはほぼ全体が路地・迷路近かった。その田辺で路地と言えば誰もがこの名前を挙げます。JR紀伊田辺駅近くの200m x 150mほどの範囲の中に細い路地が複雑に入り組んでいて、割烹や居酒屋、スナックなど200を超える飲食店が集まる「飲み屋街」です。

かつては「親不孝通」と呼ばれていました。漁り火など田辺湾の夜の風景をモチーフにした環境整備が行われ、それに合わせた公募で今の名前になりました。どの店にも安心して入れますし、カツオ、ブリ、クエ、ウツボ、イサキ、サバ、シラス等々、漁港を抱えた当地ならではの天然・獲りたての魚介類が当たり前に味わえます。昭和レトロな雰囲気は今も続いていて、もっと有名になってほしいのと思う反面、「観光地」には絶対なっていない、そんな場所です。(榎本善行 和歌山県西牟婁振興局長)

真田庵付近「真田幸村の故事が残る」(九度山町)



NHK大河ドラマ「真田丸」が放映されることで、脚光を浴びている九度山。真田昌幸・幸村親子が関ヶ原の合戦以降蟄居していた地として知られています。今は真田親子が住んでいた屋敷跡に善名称院(真田庵)というお寺が建てられています。真田昌幸はこの地で亡くなり、幸村が48歳の時に大坂城へ加勢するため、九度山を離れ大坂城目指し旅立ちます。真田幸村が大坂城に向かった道のりは諸説ありますが、屋敷から真田古墳(大坂城までの抜け穴として使われたという伝説がある)を抜け、戦場に赴いたなど歴史のロマンを感じずにはいられない場所が残っています。

写真は真田庵から真田古墳に続く道ですが、約400年前に幸村が大坂城へ旅立つ第一歩として歩んだ道かもしれません。後に「日の本一の兵」と呼ばれた真田幸村が辿ったかもしれないこの路を、幸村を偲んで歩いてみてはいかがでしょうか。(高橋伸和 南海電気鉄道(株))